

# 『今月の天候と農作業』

通巻第5618号  
8月号  
平成30年8月2日発行  
宮崎県  
宮崎地方気象台



## 【特に注意を要する事項】

期間のはじめは気温がかなり高くなる見込みです。

## 【予報のポイント】

- ・暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高く、期間のはじめはかなり高くなる見込みです。
- ・高気圧に覆われやすいため、向こう1か月の日照時間は平年並か多いでしょう。

## 【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	20	70
降水量	九州南部	40	30	30
日照時間	九州南部	20	40	40

## 【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は高い確率70%です。日照時間は平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は高い確率80%です。2週目は高い確率60%です。3～4週目は高い確率50%です。

### <1週目の予報> 8月4日(土)～8月10日(金)

期間の中頃にかけて高気圧に覆われて概ね晴れますが、終わりは湿った空気の影響で雲が広がりやすいでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

### <2週目の予報> 8月11日(土)～8月17日(金)

高気圧に覆われやすく、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

### <3週目から4週目の予報> 8月18日(土)～8月31日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

## 普通作物

### ◆普通期水稻

---

#### 1 水管理と追肥

根の健全化のために間断かん水を行い、出穂前後は十分に水を保ちます。台風襲来時は深水とし、通過後も吹返しの高温・乾燥風で障害が発生する恐れがあるため、風が止むまで深水を保ちます。

追肥はヒノヒカリでは幼穂の長さが約1 cmになったら行います。施肥量は葉色を見て判断します。一発型の肥料を用いたほ場では施用する必要はありません。

出穂後に高温になると白未熟の発生が懸念されます。適切な穂肥と水管理に努めましょう。気温より低い水温の用水が確保できる水田では、冷水掛け流しや水田内で高温になっている用水の入れ替えを行います。

#### 2 病虫害防除

いもち病は出穂前と穂揃期頃に防除します。

トビイロウンカ（秋ウンカ）の被害は減収が激しいので、予察情報や観察をもとに防除しましょう。

カメムシ防除は穂揃期とその10日後の2回行います。地域ぐるみでの周辺草刈りを出穂の2週間前までに行うとカメムシ密度低下に有効です。ただし、出穂直前に行うとカメムシを水田に追い込んでしまうため注意しましょう。

### ◆大豆

---

#### 1 中耕・培土等

雑草対策や発根を促すため、中耕・培土を2回行います。1回目は本葉三葉期に第一節の位置まで、二回目は本葉五葉期に第三節の位置までが基本ですが、梅雨の影響等で播種が遅れたほ場では、草丈や開花（莢）位置が低くなるので、培土の高さは収穫時の刈刃位置も考慮します。また、ほ場の排水溝も整備します。

#### 2 病虫害防除

ハスモンヨトウ防除は若齢幼虫時が効果的です。ほ場の観察に努め、孵化直後の幼虫食害による白い斑葉（網目状の被害）を見つけた場合は直ちに防除します。

### ◆そば

---

播種時期は山間地域で8月上中旬、西北諸県地域は8月下旬、沿海地域は8月下旬～9月上旬です。

排水溝を設置し、播種量は10㎡当たり条播が6キ、散播は約10キで、天候を見ながら播種します。

（荒砂英人）

## 施設野菜

施設野菜の育苗開始時期ですが、8月の高温は雌花の着生や発達に大きな影響を与えます。温度管理に注意し、こまめなかん水管理を行いましょう。

育苗ハウスでは防虫ネットの設置は欠かせませんが、ハウス内の温度が高くなるため、遮光資材等を利用して昼間の温度上昇を抑えます。曇雨天や朝夕には苗に光が当たるように遮光資材を調整します。

### ◆きゅうり

---

高温期の育苗では、地上部の生育に対して鉢内の根量が少なくなります。このような苗を定植すると活着不良等により初期生育が遅れます。健苗育生のためにはハウス内の温度を下げ、こまめなかん水を行います。

アブラムシ類やアザミウマ類が媒介するウイルスによって発生するモザイク病（CMV等）や黄化えそ病（MYSV）の発生に注意が必要です。防虫ネットにより媒介昆虫の侵入を防ぎ、定期的な薬剤防除やウイルス病の伝染源となるハウス周辺の除草を徹底します。

### ◆ピーマン

---

セル苗など若苗で定植する場合には、初期生育が旺盛になるため、基肥の減肥や活着後のかん水を控え、草勢を調整します。

鉢上げを行い、二次育苗する場合には、生育が進むと蒸散も盛んになるので、日中に乾燥しないように適宜かん水を行いますが、夕方のかん水や多かん水は避けます。徒長を防ぐため鉢ずらしを行い、がっちりした苗に仕上げます。

### ◆トマト

---

ミニトマトでは、下旬よりセル苗のダイレクト定植が始まります。初期生育が旺盛となり異常茎（めがね）が発生しやすくなるので、基肥を減らし、活着後のかん水を控え、草勢を調整します。黄化葉巻病（TYLCV）対策としてウイルスを媒介するコナジラミ類の防除を徹底します。

### ◆いちご

---

蒸散量の増加により、鉢内の培土が乾燥しやすくなるため、午前中に十分なかん水を行います。緩効性肥料等を置肥する場合は、今月の中旬までに施用します。極端な肥料切れは苗質に大きく影響するので、苗の生育状況に応じて、液肥の葉面散布等を実施します。

（黒木正晶）

## 葉茎菜類及びいも類

### ◆さといも疫病への対策

---

近年、さといもの疫病が各地区で多発し、深刻な被害が出ています。梅雨は明けたものの、地上部が繁茂し、疫病が蔓延しやすい状態となっています。降雨で埋もれてしまった排水路の再整備や適期・適量な追肥による健全な作物づくり、新しい葉の展開に併せた薬剤散布を続けましょう。

### ◆秋冬野菜の土づくり

---

秋冬野菜の植付けに向けて土づくりを行う時期です。作土層の拡大や排水性の向上のために深耕を行う『物理性の改善』、土壌分析に基づき石灰資材等で土壌酸度の調整を行う『化学性の改善』、完熟した堆肥等の有機質資材を投入する『生物性の改善』といった3つの視点で土づくりを行うことが重要です。

### ◆加工にんじん

---

内陸地帯では8月上旬、沿海地帯では中旬～下旬が播種の適期となります。にんじんの種子は発芽率が低いうえ、土壌が乾燥及び過湿の状態では発芽率が低下しやすいので、播種前に適度な水分を持たせた状態で耕耘・播種します。また、発芽が揃うまでは地表面の乾燥具合を見ながら適宜かん水を行います。

### ◆食用かんしょ

---

4月に植え付けたかんしょの収穫期です。生育日数が130日以上になると、いもの形や皮色が悪くなるため適期に収穫しましょう。また、ヨトウムシ類が多発する時期になるので、若齢幼虫期に薬剤防除を行います。

### ◆さといも

---

マルチ栽培の石川さといもは収穫が遅れると「水晶芋」や「割れ芋」等が発生し、品質が低下するので、8月中旬までには収穫を終えましょう。

中生種では、8月の土壌水分量が収量・品質に大きく影響します。代表的な生理障害として土壌の乾燥による石灰の吸収阻害で発生する「芽つぶれ症」があります。スプリンクラーやかん水チューブの利用、通路通水等でかん水を行ってください。また、ヨトウムシ類は若齢幼虫期の防除を徹底しましょう。

(杉村幸代)

# 果樹

## 1 常緑果樹

---

### ◆温州みかん

今年の極早生温州みかんは、結果数がやや多い表年傾向です。Mサイズを目標とした果実横径は、8月10日の時点で50～56mmが理想です。果実肥大の状況や結果数に応じて、仕上げ摘果の時期や程度を調整しましょう。

### ◆完熟きんかん

8月下旬からは、傷果と一節二果なり果を中心に荒摘果を開始しましょう。初期肥大を確保するため、結果確認後の施肥とかん水を十分に行いましょう。

### ◆マンゴー

7月下旬以降の剪定園は、第二新梢の充実が悪くなることから、翌年の花芽形成が悪くなることが報告されています。剪定直後から夜間24℃設定で加温し、昼の換気開始温度を30～32℃に設定することで温度を確保し、新梢の発生と充実促進を図りましょう。また、今年は平年に比べて果実の病害が多く発生しました。剪定枝の園外への持ち出しや、定期的な殺菌剤の散布など、総合的な対策が重要です。もう一度見直しましょう。

既に剪定が終了し、新梢が発生している園では、十分なかん水と葉面散布を行い、新梢の充実促進を図りましょう。

## 2 落葉果樹

---

### ◆ぶどう

収穫終了後の早期落葉は、貯蔵養分の減少とともに、翌年の生育にも影響を及ぼします。べと病等の防除を徹底し、早期落葉を防止しましょう。

### ◆クリ

今月から収穫が始まります。収穫は毎日行い、特に温度の低い朝の時間帯に収穫することで、病虫害果や腐敗果を減らすことができます。

## 3 台風対策

---

防風ネットの点検や、冠水対策として排水溝の整備を行いましょう。

かんきつ類のかいよう病対策である銅剤の散布は、効果が高い台風襲来前に実施しましょう。

(鈴木美里)

## 花き

### ◆夏秋ギク

---

強日射により成長点付近の葉焼けが懸念されますので、遮光や換気、葉面散布、かん水等の対策を実施してください。また、9月出荷作型では、高温や多肥により貫生花や扁平花などの奇形が発生しやすいので、過剰な施肥を控え、施設内の気温をできるだけ下げするために遮光や換気等を行いましょう。

### ◆秋ギク

---

各作型の作業計画に応じて、育苗、冷蔵、定植などの作業を計画的に進めてください。

穂の貯蔵・確保と成長促進のための冷蔵は2～4℃で行い、冷蔵期間は3週間までにしてください。また、高温により挿し穂を十分に確保できないことが懸念されますので、摘心時にベンジルアミノプリン液剤を適宜茎葉散布するようにしましょう。

### ◆ホオズキ

---

出荷終了後は、土壌伝染性のウイルス対策として、残渣の腐熟処理を徹底して実施してください。また、次作に実生苗由来地下茎を利用する場合は、発芽揃いを良くするために早めに播種を行いましょう。

### ◆スイートピー

---

品種と植え付け予定日にあわせて催芽処理・種子冷蔵を行います。

充実した大きい種子を選び、吸水処理は必ず流水中で行ってください。また、冷蔵庫のセンサー故障による種子冷蔵不足を防止するために、事前に必ず冷蔵庫の庫内温度を確認しましょう。

### ◆シキミ

---

気温が高くダニ類の被害が多い季節になりますので、定期的な防除により良品生産に努めてください。また、高温期でバクテリアが繁殖しやすいので、水揚げの際には清潔な水を使用しましょう。

### ◆デルフィニウム

---

平坦地では8月中旬に鉢上げを行います。育苗中は、定植時に本葉10枚前後に達するのを目標にかん水、施肥を行ってください。

中山間地では定植が始まります。高温による早期抽だい防止のために、ハウス内の換気や遮光を積極的行いましょう。

## ◆トルコギキョウ

---

平坦地では種子冷蔵終了後の夜冷育苗が始まります。12時間日長・夜温12℃を目安に管理し、発芽後は定期的に追肥を行って苗の充実を図りましょう。また、育苗中の高温や乾燥で低温の効果が失われますので、日中は十分な換気を行うとともに、適切なかん水管理に努めてください。

## ◆キイチゴ

---

秋に向けて、弱枝や不良枝の切り戻しを行います。その際、一度に実施するとストレスにより株が枯死する場合がありますので、樹勢維持のために充実したシュートを3～4本程度残すとともに、数回に分けて実施しましょう。

(藤原明紀)

# 畜産

## ◆家畜

---

高温多湿な宮崎の気候は家畜の飼養管理において様々な害を及ぼします。暑熱対策を実施し、家畜がより快適に過ごせるようにしましょう。

夏場は家畜の飲水量が特に増えます。黒毛和種で1日30ℓ、ホルスタイン種にいたっては1日60～100ℓの水が必要になります。成牛はもちろん、子牛や育成牛もいつでも新鮮な水が十分飲めるよう水槽やウォーターカップはこまめに清掃しましょう。なお、採食量が低下した家畜は、ビタミン・ミネラル類の補給を行きましょう。

夏場はエサが腐敗しやすくなります。ロールベールサイレージ（以下、ロール）の給与が増えていますが、サイレージ調製したロールは開封すると二次発酵（腐敗）が始まります。ロールはラップを開封したらできるだけ早く給与するようにし、その日のうちに使い切るようにしましょう。やむを得ず1日で使い切らない場合は、ビニールなどを被せ、できるだけ空気に触れないようにしてください。バンカーサイロやスタックサイロからの取り出しも同様で、取り出しはできるだけ短時間で行い、取り出しが終わったらすぐビニールを被せましょう。また、飼料のカビは要注意です。肝機能障害など様々な症状を引き起こします。カビが生えている部分は絶対に牛に給与しないでください。

ハエに加え、サシバエやアブなどの吸血昆虫も増えてきます。害虫対策は発生源をなくすことが重要です。ハエは堆肥舎はもちろん、飼槽の食べ残しや通路にこぼれたエサも発生源になりますので、飼槽や牛舎内の清掃をこまめに実施しましょう。サシバエやアブは草むらが発生源になりますので、牛舎周辺の草刈りを実施しましょう。それでも害虫が発生した場合には、牛舎内で牛の届かない範囲に駆除用の殺虫剤を散布するなどの対策を実施してください。

## ◆飼料作物

---

飼料用トウモロコシの収穫作業が始まります。暑い中での収穫・調製作業になりますので、体調管理をしっかりと行い、適宜、休憩を取りながら農作業安全を心がけて作業に従事するようにしてください。

(大山佐喜子)

## 工芸作物

## ◆茶

---

これからの作業は、来年の一番茶の母枝となる秋芽の充実と、葉層や芽数の確保を図るために大変重要です。

### 1 最終摘採と干ばつ被害防止

秋芽の生育期間を確保するため最終摘採時期は、山間地域で7月中旬、その他の地域で8月上旬が目安です。また、遅れ芽や徒長枝は、秋芽を切らないように注意して整枝します。

高温・乾燥は秋芽の生育を抑制します。晴天が続く場合は、7日おきに25～30mmの散水が効果的です。

### 2 病虫害の防除

チャノミドリヒメヨコバイや、チャノキイロアザミウマ、ハマキムシ類、炭疽病、もち病、輪斑病等の病虫害が発生しやすくなります。秋芽萌芽期と二～三葉期頃の2回、殺虫剤と殺菌剤を混用して防除します。網もち病の発生が多い茶園では、四～五葉期頃に再度追加防除を行います。

また、県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が徐々に拡大しています。この害虫は、茶の新芽生育期に成虫となり茶園を飛び回るので、茶園の観察に努めましょう。

### 3 秋肥の施用と土づくり

秋肥は、中山間地域や寒害を受けやすい品種、幼木等では8月下旬までに、これ以外は9月上旬までに、土壌診断結果を考慮し地域の施肥基準に準じて施用します。

土壌が固く根量が少ない茶園では、9月上旬を目安に堆肥を1～2ト施用し深耕します。加えて、降灰の多い茶園は苦土石灰によるpH改善にも取り組みましょう。

干ばつ被害等で樹勢低下が見られる茶園は、液肥の散布が効果的です。

(黒木清人)

## ◆しいたけ

---

夏場の高温は、しいたけ発生量の減少や品質の低下につながるため、高温対策を中心としたほだ木管理が必要です。伏込地の笠木の補充や遮光ネットの設置により、直射日光による高温障害を防ぐとともに、伏込地周囲の除伐や下刈を行い、風通しを良くしましょう。特に西日が当たる場所では、笠木の張り出しを長くしましょう。

また、害菌が発生しやすい時期ですので、ほだ場をこまめに巡回し、被害が見受けられた場合は被害木を取り除いて隔離しましょう。

(古澤英生)

## ◆たばこ

---

今月は、残幹処理や夏期深耕、並びに通常期販売に向けての出荷規格確認などが主な作業になります。

- 1 病害の耕種的防除のため、総かぎ終了したほ地から残幹処理を行いましょ。その際には、すみやかに残幹根ごと、ほ地外へ持ち出しましょ。また廃マルチについては、市町村が定める期日・場所にて適正に処理しましょ。
- 2 夏期深耕は、土壌中の病原菌密度低下や、土作りのため重要な作業となります。スキ等による反転深耕を行い、十日置きにロータリー等による碎土を行うように努めましょ。特に、今年病害が出たほ地については、念入りに行いましょ。
- 3 貯蔵害虫発生防止のため、セリコは通常期販売終了まで設置し、飛来予察に努めましょ。また、貯蔵中の吸湿防止の為、全包ポリ袋梱包を行いましょ。
- 4 通常期販売に向けて出荷包の確認を行いましょ。特に、異物・異臭・過水分・色損葉等の混合など、出荷規格を遵守しましょ。

(宮崎県たばこ耕作組合)

## 内容の詳細について

---

8月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

## 向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
普通期水稻	いもち病(葉)	並	箱施薬剤を施用したほ場であっても、薬剤の効果が切れると発病することがあるので注意します。また、穂いもちについては、出穂前に粒剤を施用するか、穂ばらみ後期及び穂揃期に粉剤または液剤による防除を徹底します。
	紋枯病	並	
	トビイロウンカ (秋ウンカ)	並	トビイロウンカは、7月上中旬にわずかな飛来が確認されたものの主要飛来と言えるようなまとまった飛来は確認していません。しかし、わずかな飛来量でもその後の増殖率が高く、坪枯れ等の被害が発生するため、ほ場での発生に注意します。トビイロウンカの第2世代の防除適期は8月中下旬になると予想されます。
	セジロウンカ (夏ウンカ) コブノメイガ	やや少 並	
野菜類等	アブラムシ類	やや少	アブラムシ類は、わずかな発生量でもウイルス病を媒介して、キュウリやピーマン等に大きな被害を及ぼすことがありますので、育苗期からの防除を徹底します。 ハスモンヨトウのふ化直後の若齢幼虫は葉裏を集団で加害しますので、この時期の発見に努め若齢幼虫期に防除を行います。
	ハスモンヨトウ等の チョウ目害虫	並	
さといも	疫病 ※	—	6月3半旬以降、県内各地で初発生が確認されはじめたため、今後の発生動向に注意が必要です。登録薬剤による継続した防除を徹底します。
カンキツ類	かいよう病	並	台風による茎葉の損傷はかいよう病の発生を助長しますので、襲来前に予防散布します。 黒点病は感染源である樹冠内枯れ枝の除去に努めるとともに、薬剤散布後の積算降水量が250mmになると次の防除が必要です。
	黒点病	やや少	
	ミカンハダニ チャノキアザミウマ	並 並	ミカンハダニは、今後の高温乾燥で生息密度が高まることが考えられます。高密度では防除効果が低下しますので、発生初期段階(寄生葉率30%、1葉当たり雌成虫数0.5~1頭)での防除がポイントです。
茶	炭疽病 もち病 輪斑病	並 並 並	炭疽病は秋芽の生育期に気温が高く、雨が多いと感染・まん延しやすいので、開葉期に防除を行います。 輪斑病の発生は気温の高い二~三番茶の摘採後に多い傾向があります。二番茶摘採後に発病葉が見られたら三番茶残葉で多発する可能性が高いので必ず防除を行います。
	チャノコクモシハマキ	やや多	ハマキ類の防除適期は発蛾最盛期から7~10日後の幼虫孵化期ですので、多発園では幼虫の発生状況を確認して防除します。
	チャハマキ	並	
	チャノソガ	並	カンザワハダニは低密度での防除に努めるとともに系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。
	カンザワハダニ	少	
	チャノキアザミウマ	やや少	チャノキアザミウマはこの時期、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくく防除効果が劣るので、残効性の長い薬剤か1週間間隔での連続散布を行います。
	チャノミドリヒメコバエ	やや少	
クワシカガラムシ	並		

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

2) ※は防除情報を発表していますので、詳しくはHPをご覧ください。

病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。

